

令和元年6月2日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K21382

研究課題名(和文)内科学領域における医事紛争の実態分析と対策案の導出に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Analysis of Medical Conflicts in the Field of Internal Medicine and the Derivation of Proposed Measures

研究代表者

大滝 恭弘(Otaki, Yasuhiro)

帝京大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：60464004

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：医療事故情報のソースの一つとして病院・医師賠償責任保険を取り扱う保険会社の保有するクローズドクレームが存在する。本研究は、日本で初めてのクローズドクレームの分析研究である。本研究では、損保ジャパン日本興亜株式会社の東京支部で処理されたおよそ10年分のクローズドクレームを分析した。第一にリウマチ膠原病領域のクローズドクレームの分析を行い、関節リウマチの患者のクレームパターンの特徴を描出した。第二に化膿性関節炎のクローズドクレームの分析を日本医療機能評価機構の医療事故情報と比較しながら検討し、化膿性関節炎の患者のクレームパターンの特徴やクローズドクレーム分析の有用性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

欧米では、医療事故情報の一つとしてクローズドクレームが注目されており、その分析成果は臨床に還元され、各領域の医療安全の向上に寄与している。しかし、様々な背景から、これまで、本邦ではクローズドクレームは注目されていなかった。本研究は、日本で初めて行われた病院・医師賠償責任保険を取り扱う保険会社の保有するクローズドクレームの分析研究である。本研究では、第一に、医療事故情報源としてのクローズドクレームの有用性を明らかにすることができた。第二に、クローズドクレームの分析成果を日常の臨床医学に還元できる可能性があることを示すことができた。

研究成果の概要(英文)：As one of the sources of medical adverse event information, there are closed claims held by insurers dealing with hospital and physician liability insurance. This is the first analytical study of closed claims in Japan. This study analyzed closed claims for approximately 10 years processed in the Tokyo Branch of Kyoho Japan Kyoto Sub-Co., Ltd. First, we performed an analysis of closed claims in the area of rheumatoid collagen disease to delineate the characteristics of claims patterns in patients with rheumatoid arthritis. Second, we examined the analysis of closed claims for pyogenic arthritis in comparison with medical adverse event information from the Japanese Organization for Assessment of Medical Function, and clarified the characteristics of the claims pattern of patients with pyogenic arthritis and the usefulness of closed claims analysis.

研究分野：病院・医療管理学

キーワード：クローズドクレーム 医事紛争 医療事故 医療過誤 患者安全

## 1. 研究開始当初の背景

本邦の医療訴訟数は1990年代に増加し、1996年には575件/年であった新規提訴数は、2004年には1100件/年と倍増してピークを迎えたが、近年はやや落ちつきを見せているものの、現在も約800件/年の新規の提訴がある。医療訴訟を含む医事紛争の増加の影響もあって、各病院において医療安全に対する意識が高まりを見せ、医事紛争の防止に向けた様々な取り組みが活性化している。医事紛争を減少させ、医療安全体制を構築するためには、何よりもまず医事紛争の実態を明らかにする必要がある。しかし、公開されている医事紛争事例は、裁判所の判決手続きにより解決に至った医療訴訟事例の一部にすぎず、判決であっても、その多くは公開されていない。そして、裁判外で解決された医事紛争数は、その数倍にのぼるが、これらはすべて非公開である。また、医事紛争は多くの医療者にとってストレスであり、一般には恥じるべき事実と考えられているため、学会等においてもその情報が公開されることはほとんどなく、医療者に自発的な医療紛争事例の公開を期待することはできない。これまで、本邦における医事紛争の研究は、主に公開された医療訴訟判例をもとに、事例分析研究として行われてきたが、裁判事例は逸話的であること、また、医事紛争事例は非公開のものが極めて多いことなどから、十分な研究が行われ、医事紛争の実態が明らかにされているとは言い難い状況である。本邦の医事紛争の多くは、裁判手続きによるかどうかにかかわらず、保険会社の病院・医師賠償責任保険とかがわっており、保険会社は極めて多くの医事紛争事例(クローズドクレーム)を保有している。欧米では、1980年代から、医事紛争の実態分析及び医療安全向上のための一資料として、クローズドクレーム分析が行われているが、本邦ではこれまで様々な理由からクローズドクレームは分析の対象とされなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は、病院・医師賠償責任保険を取り扱う保険会社の保有するクローズドクレームの中から、内科領域に属する疾患に関わる医事紛争事例を抽出・分類し、医事紛争の患者背景、疾患の種類、医事紛争の過程とその原因、争われた法的注意義務、紛争の顛末等について分析を行い、実態を明らかにすること、クローズドクレーム分析の有用性を検討すること、日本医療機能評価機構の医療事故等収集事業と比較検討することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究は下記の手順で行った。

### (1) 内科領域の医事紛争事例の抽出

本研究は、本邦の病院・医師賠償責任保険において、圧倒的なシェアを誇る損保ジャパン日本興和株式会社の協力を得て行われた。東京支社の取り扱った医事紛争事例を対象に、分析対象事例を設定し、それらの医事紛争の患者背景、疾患の種類、医事紛争処理の過程と紛争に至った原因、争われた法的注意義務、紛争の顛末等を明らかにした。

### (2) クローズドクレーム分析の有用性の検討

(1)で抽出した事例を対象に、様々な角度から分析を加え、クローズドクレームが本邦の医療安全向上のための資料となりうるかについて検討を加えた。

### (3) 日本医療機能評価機構の医療事故等収集事業との比較検討

クローズドクレーム分析と日本医療機能評価機構の医療事故等収集事業とを比較して、その特性を分析した。

## 4. 研究成果

医療事故情報のソースの一つとして病院・医師賠償責任保険を取り扱う保険会社の保有するクローズドクレームが存在する。本研究は、日本で初めてのクローズドクレームの分析研究である。

本研究では、損保ジャパン日本興亜株式会社の東京支部で処理されたおよそ10年分のクローズドクレームを3.(1)の手順で分析した。

第一にリウマチ膠原病領域のクローズドクレームの分析を行い、関節リウマチ等の患者のクレームパターンの特徴を描出した。当該領域におけるクレームの特徴を明らかにすることができた。クローズドクレーム分析は、一定の領域における医療安全向上のための基礎資料として有用であると考えられた。

第二に化膿性関節炎のクローズドクレームの分析を日本医療機能評価機構の医療事故情報と比較しながら検討し、化膿性関節炎の患者のクレームパターンの特徴やクローズドクレーム分析の有用性を明らかにした。クローズドクレーム分析は、個別の疾患領域における医療安全向上のための基礎資料として有用であると考えられた。また、クローズドクレームには、日本医療機能評価機構の医療事故情報とは異なった特徴があり、クローズドクレーム分析は、それら

とは独立の有用性を有すると考えられた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Characteristics of claims in the management of septic arthritis in Japan:  
Retrospective analyses of judicial precedents and closed claims.  
Otaki Y, DaSilva MI, Saito Y, Oyama Y, Oiso G, Yoshida T, Fukuhara M, Moriyama M  
Journal of the Chinese Medical Association : JCMA 81(3) 236-241 2018年3月  
Analysis of Closed Claims in the Clinical Management of Rheumatoid Arthritis in Japan.  
Otaki Y, Ishida MD, Saito Y, Oyama Y, Oiso G, Moriyama M  
Chinese medical journal 130(12) 1454-1458 2017年6月

〔学会発表〕(計13件)

リウマチ診療におけるガイドラインの参照率の検討  
笠井健司, 吉田智彦, 吉田智彦, 勝山直興, 勝山直興, 朱曉人, 大滝恭弘  
日本リウマチ学会総会・学術集会プログラム・抄録集 62nd 862-862 2018年3月  
リウマチ診療における法的ピットフォールと医療安全:過失と説明義務  
大滝恭弘  
日本リウマチ学会総会・学術集会プログラム・抄録集 62nd 303-303 2018年3月  
クローズドクレーム分析の成果と展望  
大滝恭弘  
日本医療安全学会学術総会抄録集 4回 2018年2月  
リウマチ医療の安全と倫理 医療訴訟を振り返る  
大滝恭弘  
日本臨床リウマチ学会プログラム・抄録集 32nd 51 2017年  
クローズドクレーム分析の有用性  
大滝恭弘  
日本医療安全学会学術総会抄録集 3rd 117 2017年  
金銭請求を伴うクレーム処理の実際とクローズドクレームの分析の有用性 クローズドク  
レーム分析の有用性  
大滝恭弘  
日本医療安全学会学術総会抄録集 3回 117-117 2017年3月  
リウマチ診療ガイドラインの取扱いにおける司法と臨床の相互理解と課題  
吉田智彦, 勝山直興, 大滝恭弘, 笠井健司  
日本リウマチ学会総会・学術集会プログラム・抄録集 61st 771-771 2017年3月  
化膿性関節炎の診療における医療安全上の注意点 クローズドクレーム分析を中心として  
大滝恭弘, 齊藤裕一, 大山泰明  
日本医療・病院管理学会誌 53(Suppl.) 165-165 2016年9月  
日本におけるリウマチ疾患のクローズドクレーム分析  
大滝恭弘

回 614-614 2016年3月

診療ガイドラインの取扱いにおける司法と臨床の相互理解と課題

大滝恭弘, 秦奈峰子, 福原正和, 吉田智彦

日本医療安全学会誌 2016年3月

司法におけるガイドラインの位置づけ

大滝恭弘

日本医療安全学会・シンポジウム 2016年3月

比較的稀なりウマチ疾患のクローズドクレーム分析と警鐘事例を通じた患者安全向上への示唆

大滝恭弘, 石田牧子, 齊藤裕一, 大山泰明

日本医療安全学会学術総会抄録集 2nd 198-198 2016年3月

リウマチ性疾患のクローズドクレーム分析からみたリウマチ科の医療事故の実態分析と対応策の検討

大滝恭弘, 石田牧子

医療の質・安全学会誌 10(Supplement) 214-214 2015年10月

〔図書〕(計2件)

〔改訂版〕Q&A 病院・医院・歯科医院の法律実務

大滝恭弘 (担当:分担執筆)

新日本法規 2016年11月 ISBN:9784788281936

医療法学入門

大滝恭弘 (担当:共著)

医学書院 2016年3月 ISBN:9784260024501

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

研究分担者氏名: 大滝 恭弘

ローマ字氏名: Otaki Yasuhiro

所属研究機関名: 帝京大学

部局名: 医療共通教育研究センター

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 60464004

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。